農と食のコラム

ポレポレできる公園づくり

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕
東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕
「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

足を運ぶたびに「いい空間だ」と思う一つが長野県伊那市高遠町にあるポレポレの丘である。高遠町といえば、城址公園に咲く小彼岸桜で全国にその名を知られ、約30万もの人が花見に訪れるが、その城址公園に隣接するようにしてポレポレの丘はある。中央アルプスの眺望は絶景であるが、何よりも、一日、ぼんやりしていたくなるようなホッとできる空間が魅力だ。ちなみにポレポレはスワヒリ語で「のんびり」「ゆったり」という意味だそうだ。

ポレポレの丘は、花や野菜が栽培される「マイガーデン」と、子どもたちが自然の力を五感で感じながら遊べる「プレイパーク」やビオトープが組み合わされた2.5ヘクタールほどの複合空間である。

「マイガーデン」は市民農園というよりは"大きな自宅の花園・菜園"といった感じで、40ほどの個人や家族、グループが利用。花と野菜等の組み合わせ栽培「コンパニオンプランツ」を推奨しており、いろいろな野菜が栽培されているそばで、季節の花が咲き乱れている。

マイガーデンの一部。数種類の野菜を組合せて栽培している横に花木が咲いている

「プレイパーク」は、そこにある木々にブランコやロープがぶら下げられ、また幅1.8mもの大きな滑り台もあり、その横では羊3頭が放牧されている。子どもたちは、ここで思いっきり体を使って遊ぶと同時に、ビオトープでの自然観察もすることができる。

そもそもここは、田畑が狭くて大型農機が入らないうえに、水も乏しく、次第に耕作放棄されて山林と化していた。30年以上放置されていたものを再生して、桜の時期以外でも人を呼び込もうと、花による観光公園を目指したのが始まりだ。賛同者を集めて「高遠花摘み倶楽部」を立ち上げ、私財投入と補助金によって、2005年にポレポレの丘を開設した。それぞれに好きな花や木を植えて公園化してきたものの、事業としては成り立たせることは難しいとして脱退が相次ぎ、代表であった現理事長の赤羽久人氏だけが残って再生に取り組んできたものである。

それまでのコンセプトを転換しての取り組みの第一が、きれいな花を寄せ集めての観光公園ではなく、水仙をはじめとする里山に当たり前にあった山野草中心への切り替えである。第二が、子どもの育成重視で、「『だめ！』のない遊び場」づくりである。第三が、大人の居場所づくりで、菜園だけでなくカフェや野外コンサート場も設けられた。第四に、会員制による会費収入による収支バランスの確保である。ただ、出入りは自由かつ無料である。

筆者なりの理解では、外から人を呼び込む公園から、子どもも含めた地域住民自らが利用して自ら楽しむ公園への脱皮を図ってきたということができる。そしてこれを地域住民の持つ特技を生かしながら手作りしてきたところが肝心で、ボランティアによる運営が基本だ。ここから人的交流がすすみ、コミュニティ空間が形成され、次第に地域づくりの拠点に近づきつつあるようにも感じる。ここでの活動は小さいながらも、壮大な実験的試みとしての大きな意味を持つように思う。

<表紙・目次へもどる>